豊かな地域とのつながりを生かしながら、共に高め合える小谷っ子の育成のために

指定校１年次　小谷村立小谷小学校　田村寿樹

Ⅰ　本校の新聞活用（ＮＩＥ）の現状

本校は全校児童１３１名、単級のため保育園から中学校卒業までほぼ変わらない仲間たちと毎日の学習を積み重ねている。本校の学校教育目標「一人一人が　いきいき輝く　小谷っ子」～とことんまなびきたえる　だいじなあなたとわたし　こころにひびくこえ～のもと、「伝え合い、深め合う　小谷っ子の育成」を本年度の全校研究テーマとして研究を進めている。

オープンスペースを特徴とする本校において、図書館は登下校や教室移動の際に、子どもたちが必ず通る学校の中央に位置している。そこには、小谷原産のイタヤカエデで作られた新聞閲覧台が設置され、多くの子が足を止めて新聞に親しんでいる姿が見られる。全校児童対象にアンケートを実施し、どのくらい新聞を読んでいるか調査した。その結果、低学年では読む子が４７％、読まない子が５３％だった。高学年では読む子が７２％、読まない子が２８％だった。本年度の６年生の全国学力・学習状況調査の児童質問紙でも「新聞を読んでいますか」の項目について「ほぼ毎日読む」と回答した割合は 14.8%（全国 7.4%、長野県 7.3%）と、本校は全国や県平均と比べて高い。本校の児童は高学年になるにつれて、新聞に興味関心をもち、自ら情報に触れようとする子が多くなる傾向が明らかになった。

また、各学年の実態に応じて国語や社会の学習と関連させて校外学習や調べ学習で学んだことを新聞の形式でまとめている。信濃毎日新聞社の出前授業を受けたり、記事のスクラップに取り組んだりして、新聞を身近に感じ、情報に触れたり、発信したりする環境整備にも取り組んできている。

Ⅱ　実践のねらい（育てたい力）

今年度、ＮＩＥ部会では各学年の児童の実態に合わせ、以下の３点を願う子どもたちの姿と考え、取り組みを進めてきた。

① 新聞に興味や関心を持ち、情報を集めようとする（主体的な学び）
② 気になる記事を伝え合う、聞き合う情報交換をする（対話的な学び）
③ 相手意識を持って表現し、お互いの考えを深める（深い学び）

特に相手意識を持って表現する学習場面、それを振り返る学習場面を意図的につくり、課題の解決に向かうことを大事にして、全学年・全教科で取り組んでいる。今年度は新聞活用をどのような場面で取り入れていくことが子どもたちの協動的な学びにつながるかを探っていきたい。

Ⅲ　研究の概要

一　全校児童が新聞に触れ、親しむ取り組み

１　図書コーナー新聞閲覧コーナー

通常の新聞閲覧台の他に、７紙の読み比べができる「新聞閲覧コーナー」を設け、全校児

童がいつでも読めるようにした。並んだ各紙の一面記事を見て、「ゴーン会長が逮捕された。５０億ってすごいお金だよね」「大坂選手、世界ランク１位だって、すごいよね」などと、子どもたち同士で話題がふくらみ、社会情勢に興味をもっている様子がうかがわれた。また、これまで子ども新聞は１紙だったが、２紙を閲覧台に並べて読めるようにした。低学年、高学年とも楽しみにしている子が増え、足を止めて多くの子が読むようになった。

２　各教室への新聞配達

新聞閲覧コーナーに足を止めて新聞に興味を持つ子は限られていたため、閲覧が終わった前日の新聞を高学年の各教室に配達するようにした。すると、子どもたちは一面を眺めるだけではなく中をめくるようになり、４コママンガに興味を持つ子や「昨日の御嶽海はさ…」とスポーツの話題で担任と話題を膨らめる子が出てきて、新聞がより身近な存在となっていった。

二　各学年の取り組み

〈４年生〉

４年生では今年度新たに長野見学の見学地に信毎本社を取り入れた。実際に新聞記者が働く様子を目にしたり、新聞づくりの歴史に触れたりして興味をもつことができた。また、見学の直後に出前授業で新聞づくりについて学び、見出しの付け方や５Ｗ１Ｈの内容をもとに書きたいことを整理していくと読み手に分かりやすい記事になることを学んだ。それまでに消防署、上下水道見学についても新聞にまとめ、出前授業の後にも糸魚川見学、ゴミ処理場見学などのまとめでも学んだことを生かすことができた。新聞作りの経験を重ねる中で、友だちのいい所に付箋を貼ってお互いに認め合ったり、校内の壁新聞として自由に場所を決めて掲示したりして情報交換し、次の新聞づくりに生かすことができた。

〈５年生〉

５年生では、信濃毎日新聞社の方にお越しいただき、出前授業を行っていただいた。新聞の紙面の見方、記事の読み方などを教えていただいた。今まで目を通さなかった分野の記事についても一生懸命読み取ろうとする姿が見られ、より新聞を身近なものとして親しむ様子が見られるようになった。また、社会の時間では、気になった新聞記事を切り取ってまとめる活動を通して、一人ひとりの関心をもとにしながら、記事の内容について意見を交わすことができた。新聞が教室に置かれていることで、普段の生活の中でも子どもたちが新聞に目を通す姿が見られ、関心を抱いた新聞記事から会話が生まれていく様子も見られた。

〈６年生〉

６年生では行事や出来事を本部役員が中心となり、「児童会新聞」を発行してきた。１学期の終わりにやぎの「ゆきちゃん」の世話を委員会活動として始めることになった。担当の委員会の子だけでなく、全校児童がえさをやったり散歩をしたりしてかわいがり、すぐに小谷小のアイドルになった。学校から遠く離れた施設から連れてくる時に苦労したことなど、みんなが知らなかったことも記事に加えた。カラー写真も入れた児童会新聞は初めての取組で、子どもたちの話題になっていた。

三　総合的な学習の時間における新聞活用

〈５年生での授業実践事例～“新聞で学ぶ”の視点から～〉

１　単元名　「小谷の棚田」

２　本時に至るまで

風太さんと棚田

９月、社会科の単元「国土の地形の特色と人々の暮らし」の中で、棚田のことが話題になった。子どもたちは「棚田ってなに？」「あのさ、段々になっている田んぼだよ」「洋二くんの家の前の田んぼ、あれ棚田じゃない？」と、自分の暮らしの中にある棚田を言葉にしてやりとりをしていった。今年度、全国棚田サミットが小谷村で開催されたことを子どもたちに伝えると、「なんでわざわざ小谷の棚田に全国の人たちが集まってくるの」「棚田なんてそこら中にあるじゃん」といった反応が返ってきた。棚田サミットの企画、「棚田巡りツアー」で実際に全国の人々が足を運んだ棚田が小谷村の中谷地区にあることを伝えると「全国の人たちがどんな棚田を見に来たのか、行ってみたい」という声があがり、実際に出かけてみることになった。

９月２８日、初めて棚田に向かうバスの中で、「ただ広いだけだよ」「田植えするのは大変だったんだ」「棚田ってめんどうくさい」と話していたのが、棚田のある中谷地区に住む風太さんだった。出かけた棚田は、中谷地区の人々がオーナー制度を開設し、都会の人々を誘致しようと地域おこしの一環として盛り上がった場所だった。風太さんは、何度かオーナー制度を利用する人と一緒に田植えや稲刈りを経験しており、風太さんにとっては中谷の棚田は“ごく身近にある田んぼ”の１つでしかなかった。しかし、クラスのみんなと一緒に出かけた先で、一面に広がる金色の稲穂を見るや、足を止め、次には「１番上から見たらどうなのかな」と駆け出していた。田んぼの畦で、クラスで飼育しているカナヘビを見つけて「カナヘビ見つけたよ！」と手のひらにのせ、力を入れすぎないように優しくなでていた。

【帰ってきた風太さんが綴った振り返り】

友だちといっしょだったら楽しいと思った。
かえるとかなへびがいっぱいいた。
すずしくて気もちいい。
下から上までのぼるのがとてもきつい。
近くに川があるけど、川にいく道が遠い。
お米がきれいだった。

棚田を「ただ広いだけ」「めんどくさい」「大変」と感じていた風太さんが、同じ棚田の中に「楽しい」「きれい」「きもちいい」を感じていた。風太さんの気持ちの変化はどのように起こり、どうなっていくのか、追ってみていきたい。

棚田を知っていく

クラスのみんなで棚田へ出かけた後、「全国棚田サミット」では何をやっていたのか、自分たちが出かけた棚田のオーナー制度とはどのようなものか、各紙の新聞記事をもとに調べていった。そこで後継者不足や農地整備の問題を抱え、荒れ地と化していっている棚田の現状

を知った風太さんは「どんどん減っているからちょっとは残したい」と考えるようになった。子どもたちは「荒れ地にしないためにも、棚田のことをもっと知ってもらおう」と考え、１０月の村の文化祭でのステージ発表や、パンフレット作りに取り組んだ。

村の文化祭での発表を経て、棚田のよさやこれからの課題を話し合っていったとき、「小谷にはあまり若い人がいないから、管理する人がいなくなって棚田が荒れ地になってしまう」という意見が出された。

【前時の風太さんの振り返り】

棚田がとっても減ってきているから、もう減らさないようにしたいし、増やしたい。

その後、自分たちが出かけた棚田は、１３年前までは荒れ地と化していたことがデータベースから見つけた１つの新聞記事から分かった。自分たちが「荒れ地にしたくない」と願った棚田がもとは荒れ地であったこと、復元には地域住民の強い願いがあったことを知った子どもたちが、これから棚田とどうかかわっていくのかを考えようと本時を迎えた。

３　本時案

（１）本時の主眼

自分たちが感じた棚田のよさや年々田んぼが減っていく危機を確認した子どもたちが、写真や新聞記事をきっかけに、自分たちがよさを感じた棚田が、荒れ地から復元されていたという事実を知ることを通して、棚田を復元した人々の苦労や大変さに気づき、復元しようとした人々の思いを考えることができる。

（２）本時の位置　２４時間扱い中　第１２時

前時　これまでの棚田の活動を振り返り、自分たちがパンフレットや新聞で受け手に伝えたかったことを確認し、これからの自分たちの活動を考える。

次時　感じた思いやさらに知りたいことをまとめ、これからの活動を考える。

（３）指導上の留意点

・これまでの活動を振り返ることができるように、模造紙にまとめたものを掲示しておく。

・資料の新聞記事は拡大して提示し、教師が声に出して読むことで、内容を確認できるようにする。

（４）展開

	学習活動	予想される児童の反応	教師の支援　評価	時間
導入	１　これまでの活動を振り返り、現在の棚田の状況を確認する。	単元を貫く願い：小谷の棚田をもっと知ろう。 ・荒れ地には、木を植えたらいいんじゃないかな。 ・木を植えれば、生き物たちにとってはいい環境になるね。	・前時出された考えのまとめを掲示する。	３
展開	２　荒れ地になってしまった棚田を見て感じたことを出し合う。	・めちゃくちゃでひどい。 ・棚田だってわからない。 ・木を植えればいいと思っていたけど、やっぱりだめだ。 ・こうなっちゃったらどうしようもないのかな。	・１３年前の荒れた棚田の写真を提示する。	10

展		・棚田をなおせばいいよ。 ・でも、管理する人がいないと意味ないよ。 ・中谷の棚田だったなんて信じられない。 ・なんで棚田をなおそうと思ったんだろう。	・現在の棚田の写真を提示する。	
		学習課題：なんで荒れた棚田を復元したんだろう。		
開	3　新聞の内容を確認する。	・「中谷郷が元気になる会」の人たちが復元した。 ・都市部との交流の場にしようとした。 ・棚田の形を整えたり、整備したりした。 ・地域を活性化させながら、食活動を守りたいという思いがあった。 ・木を切り倒して、きれいにしていったんだな。	・棚田の復元についての新聞記事を提示する。 ・新聞記事のコピーと拡大した新聞記事を用意し、全体で意見を共有できるようにする。	5
	4　新聞記事を読んで、感じたことを出し合う。	・どうしてこんな大変なことをして棚田を復元したんだろう。 ・都市部との交流を目的にって書いてあるよ。 ・小谷には、若い人が少ないから都市から来てもらおうと思ったんだ。 ・なんとかして、きれいな棚田を守りたいって思ったんだろうな。 ・あの棚田はたくさんの人たちが守りたいって思った棚田だったんだ。	・グループで考えを出し合う場を設ける。 ・自分の思いをもてるよう、学習カードに記入する時間を設ける。	17
まとめ	5　今日の授業で感じたことを発表する。	・自分たちが行った棚田が荒れ地だったと知ってびっくりした。 ・苦労して復元された棚田だからこそ、今のきれいな棚田が守れるように棚田のよさを都会の人たちにも知ってもらいたい。 ・どうしてここまで苦労して棚田を復元したのか聞いてみたい。	・次時の見通しがもてるよう、発言をまとめていく。 新聞記事や写真から、荒れ地になった棚田を復元した人々の思いを考えることができたか。	10

本時を振り返って

はじめに１３年前の荒れ地の写真を提示し、荒れ地になった棚田への思いを出し合った。その後、その荒れ地は自分たちが実際に出掛けて遊び、親しんできた棚田であることを伝えると、子どもたちからは「え～！！」「まじか！」「うそでしょ…」と、驚きの声があがった。「なんでこんなに修復できたの？」と声があがったところで、棚田復元にかかわる新聞記事を子どもたちに提示した。

【子どもたちの感想】

○ひどくあれていた棚田はぼくたちが見に行った棚田だなんて思わなかった。あれた棚田を復元させるために人の努力や勇気がどれほど必要かよくわかった。
○えっこれどこの棚田だろうと思っていたけど、まさか私たちの行った棚田なんて全く思っていませんでした。私たちの知っている棚田があれ地だったなんてびっくりしました。棚田はあれ地になってもまた復活させることができるんだなーと思いました。もっと私たちが行ったあの棚田の事を知りたくなりました。
○人の努力っていうのは、なおそうと思わなきゃできないことだし、みずからなおそうと思ったのに、感心しました。１３年前は、もうほぼあれ地といっていいくらいの存在だったのに１３年だけであそこまで復帰したのはすごいと思った。なかなかできないことをやりきろうと思ったのは、とてもすごいことだし、自分は絶対できないことを４６才の方がけんめいに努力して、がんばろうと思ったのはとてもすごかったと思う。多分自分じゃ絶対にできないことに取り組んでいてすごいなと思いました。
○全然（自分たちが行った棚田だと）わからなかった。あんなに変わるのかと思った。どうやったらあれからこうなったのかわからない。

このように、子どもたちは棚田の今と過去について思いを強めていった。

本時で提示した荒れ地の棚田の写真が自分たちの出かけた棚田だと知った時、風太さんは顔を上げ、体を前のめりにしていた。それは、自分の住む中谷地区にある「友だちと一緒だったから楽しい」「風が気もちいい」「お米がきれい」といった印象をもった棚田が、かつては荒れ地であったことへの驚きの表れだったのではないだろうか。

【本時の風太さんの振り返り】

荒れ地の写真を見た時は、どこの棚田だろうと思ったけど、みんなで行った棚田と知ってとてもびっくりしたし、きれいに直していてすごいなと思った。

知る機会もなかったであろう棚田の過去と出合い、「増やしたい」と願った棚田について、「きれいに直していてすごい」と、今と過去のあいだに風太さんは目を向けていった。その驚きをもちながら、友だちと言葉を交わす時間をとることができていたなら、風太さんが棚田やそこにかかわる人々へどんな思いをふくらめていっただろうか。過去の事実との出合いに驚く子どもたちがいたからこそ、子どもたちがそこで感じた思いを、次の展開への意欲に結びつけられなかったことが反省される。新聞記事とのかかわりから出合った驚きや衝撃など、子どもたちが抱いた思いが活動を広げたり深めたりしていくきっかけとなるよう、関わりを考えていく２年次にしてきたい。

４　授業研究会から

・５分過ぎで荒れ地の写真を見せた場面で「えっ、ここ棚田？」「えっ、前行ったじゃん」と興味を示した反応があった。子どもたちの驚きを見ると、新聞記事の役割はよかった。
・「なかなかできないことをやりきろうと思ったのはとてもすごいことだし、自分では絶対できないことを４６才の方が懸命に努力して頑張ろうと思ったのがすごいと思った」という児童の感想があった。記事を読み取って、自分の思いと重ねて考える姿が見られた。
・記事から先生が読み取らせたかったのは、人。棚田にかかわる人が「地域を元気にしていきたい」というキーワードが記事にある。線を引かせ、それを書き出せば、この記事から何を読み取ればいいかがわかる。
・もっと他の子の意見を聴きたかった。先生と子どものやりとりだけでなく、隣同士喋った

り、グループで話し合ったりする場面が欲しかった。
・学習カードの問いかけがやや不明確だった。信毎のカードだと、思ったこと、考えたことの根拠を読んで書き込んでいけば発表になる。そういう工夫をしていけば、話し合いができていく。

四　研究のまとめ

〈実践のねらいと関連して〉

① 新聞に興味や関心を持ち、情報を集めようとする（主体的な学び）

○図書コーナーに全国紙を並べ、自由に閲覧できるようにしたこと、各教室に配達したことは、子どもたちが新聞への興味・関心を高めるのに役立った。

●教師が新聞から関連する記事を集めて提示するだけでなく、子どもたちが主体的に調べ進めていかれるように研究していきたい。

② 気になる記事を伝え合う、聞き合う情報交換（対話的な学び）

○新聞記事を切り取ってまとめる活動を通して、身近なニュースに興味をもち、スポーツや株価など、友だちが興味を持った話題に関心をもつきっかけともなった。さらに多くの学年で取り入れていきたい。

●新聞記事の要点をまとめずに、一通り目を通した後、感想記入の時間に移ってしまったことで、かかわった人や願いについて十分に考えを巡らせることができなかった。お互いに意見を交わし合う場を設定できなかったことが課題になる。

③ 相手意識を持って表現し、お互いの考えを深める（深い学び）

○４年の壁新聞の実践から、友だちのいいところを付箋に貼って伝え合ったり、情報交換し合ったりする場面を設けることをこれからも大切にしていきたい。

●３学期末に５，６年で行っているポスターセッション形式の総合のまとめとも関連づけ、家族に伝える、低学年に伝えるなど、伝える相手を意識してまとめることを大事にしたい。また、連学年や姉妹学級などでお互いに情報交換できるようにしたい。

五　残された課題

・「過去の事実を今に受け継ぐ役割」としての新聞記事の価値に気づかせ、子どもたちの学びの有効な支援ツールとなるように、実践を重ねていきたい。
・購読した新聞の活用について、今年度は子どもたちが主体となって活動することが少なかったので、委員会や学年の活動として位置づけ、さらにたくさんの新聞を活用できるような場を児童とともに考えていきたい。

〈資料〉　○新聞記事　信濃毎日新聞朝刊　２００５年（平成１７年）　１１月８日（火）

小谷の棚田 復元の夢

中谷地区の有志メンバー 来年50アールに田植え

小谷村中土の中谷地区の住民を中心にした有志が「中谷郷が元気になる会」を結成、都市部との交流の場にしようと荒れた棚田の復元に取り組んでいる。秋田県などで米作りを十数年続けており、永島さんらを通じて都市部からの参加も呼び掛ける。来春には初の田植えを予定しており、俳優の永島敏行さん（49）も同会の依頼を受けて協力。来春には初の田植え

同会は六月に設立、メンバーは約五十人。車で近くまで行ける地区内の棚田約五十アールを選定、ヤナギなどを取り除いて田を復元する。永島さんも五月から村を四回訪れており、今月初めには棚田の形を整えたり木を取り除く作業にも参加した。

同会は、オーナー制の畑を来春にも村内に開設する予定。地元産の農産物を使った郷土料理を天町市の店舗で提供することも計画している。

細野武久事務局長は（52）は「地域を活性化しながら、食を守る活動にもしたい」と話す。永島さんは「意欲に動かされた。米作りのような僕たちが子ども時代に経験したことが東京ではできなくなっている。それを子どもたちに体験させたい」と話している。

荒れた棚田から丸太を運び出す永島敏行さん（左）ら